

自衛隊基地見物記

私は、ここ数年の間に首都圏にある主な自衛隊の基地（駐屯地）と市ヶ谷の本庁を訪ねたので、まとめて報告する。

①海上自衛隊横須賀基地

2014年6月15日、旅行会社主催のバスツアー（団体旅行）で、横須賀周辺の複数観光地を回ってきた。目玉は、海上自衛隊横須賀基地の一般公開だった。一般公開は年に一度か二度しかない。家族連れを含む多くの人が押しかける。JR横須賀駅からほど近い埠頭が会場だった。以前ぶらりと訪れたとき、この埠頭には、最大級の護衛艦「いずも」（19, 500トン、長さ249メートル）らしい艦が係留されていたのを私は遠くから見たことがある。「いずも」は横須賀基地所属だから間違いないだろう。それは「航空母艦」にそっくりであり、広い甲板上に複数ヘリコプターが発着可能だ。遠くから見ても、巨大な艦船だった。専門

家の間では、ヘリ空母とも称される。自衛隊はその種の艦船を合計3隻持っている。さらに同型艦の「かが」が本年（2017）3月に就役するから、4隻そろふことになる。戦闘ヘリコプターによる大規模な戦闘が行えるポテンシャルをもつ（将来、F35B戦闘機を搭載する可能性もある）から、そうとうな海軍力だ。

さて会場内では、集合時間まで単独行動だ。もはや旧タイプに属する二隻の護衛艦が埠頭に横付けされ、中が公開されていた。早速私はタラップを渡ってそれぞれに乗艦し、中を見学して回った。

所々に説明役（監視役を兼ねる）の自衛官が立っており、一般客の質問に答えてくれる。艦に装備された武器・兵器についても自慢げに話してくれる。性能面の詳細に関しては、さすがに口をつぐんだ。主砲（口径76ミリ）の砲塔に人は入らず、遠隔制御するのだそう。ミサイルや魚雷発射装置を備えているし、船橋の目立つ位置に対空機関砲が据えられている。後方デッキにはヘリポートがあり、ヘリコプターを運用す

るのも護衛艦の標準的な装備だ。

近くの海上では、エンジンつきゴムボートが高速で走り回り、救難訓練の様子を見せていた。大勢の観客の前で訓練を行うことには意味があるようだ。



護衛艦ゆうぎり

## ②航空自衛隊入間基地

2014年11月3日、狭山市駅より歩いて入間基地へ行った。入間基地は首都圏にあつて、専用の滑走路をもつ広大な基地だ。駅を出ると同好の人たちがぞろぞろ歩いてきたから、その列に加わった。ゆつくりと進むものだから入門まで30分ほどかかった。この日入間基地で航空祭があり、何万人もの人が押し寄せる。特に入間の航空祭では人が多い。



入間航空祭で、輸送機が飛び立つ

ようやく入った会場では、滑走路に近いエプロンに航空自衛隊自慢の航空機がずらりと並んで展示されていた。攻撃ヘリコプターから対潜哨戒機、大型の空中給油機、現用の戦闘機などがあつた。私がおの昔、旧立川基地内で風洞実験の実習で係つたジェット輸送機C・1も健在だつた。ひとつの感動だつた。一通り見て回つて満足し、早めに帰ることにした。ときおり見上げた空にはまだカーキ色の輸送機などが低い高度で飛んでいたので、早すぎたかもしれない。

### ③ 陸上自衛隊朝霞駐屯地・りつくんランド

2016年9月24日(土)、陸上自衛隊朝霞の広報センター(りつくんランド)に和光市駅より歩いて一人で行つてきた。りつくんランドは朝霞駐屯地の一角にあり、なかなかの設備と展示品がそろつている。だれでも無料で入れる。家族連れが来て楽しめるようになっていゝる博物館的な施設だ。センタービルの中には、最新型の10式戦車やヘリコプター、兵士の装備品の展示などがあり、売店や映像室まである。ここでは、富士の演習場での訓練の様子が上映されていた。私は、うわさにも聞く富士の山すそにある演習場での一般公開訓練をいつか実際に見に行きたいと思つている(見

物記を書くためでなく、単なる興味本位)。戦車や大砲の射撃訓練がすごいのだそうだ。——複数の戦車がキャタピラ音をたてながら走り回り、迫撃砲が一斉に轟音を放つと、標的に向けて実弾(?)を射ち込むのを想像すると……。



74式戦車と90式戦車らしい2両  
後方にあるビルは広報センター

室外の広場には、歴代の戦車、自走砲、ロケットランチャーなどが、ずらりと並んでいる。まだ使えそうな代物だ。近くで見ると、静止しているためか、大き

な模型にみえたりする。少年のころに赤羽近辺で修理中の戦車を垣間見て、すごいと思ったりしたものだ、そんな感動はよみがえらなかつた。広い駐車場の向こうには、歴史的な（戦前からの）木造建造物があつたが、見学できる時間が限られていたので、心を引かれながらも割愛した。

センタービルの脇に地下施設があるに気づいた。バグからライトを取り出し、いさんで私は中に入った。それも展示物のひとつであり、薄暗い電灯の下で数体の人形の将兵がいて、野戦での作戦本部の様子を示していた。

#### ④航空自衛隊百里基地

2016年11月27日（日）、旅行会社主催のバスツアーで、百里基地の航空際に行ってきた。百里基地は遠いので、一人で電車やバスを乗り継いで行くより、ツアーのバスの方が楽に行けると思った。6時45分東京駅そば集合だったから、出発が早すぎる心配があつたが、私は朝一番の電車に乗ってなんとか集合時間に間に合つた。航空自衛隊百里基地は、茨城空港と滑走路を併用している。やや辺鄙な、広い場所にあるが、この日は、人間ほどではないにしろ、車・バス・人で

いっぱいになる。バスは基地内の臨時駐車場に9時40分ごろ着いたが、航空際はもう始まつていた。あいにく曇り空だったが、いきなり、戦闘機の爆音が響き渡つた。



F-4ファントムの着陸、ブレーキの  
パラシュートを開く

滑走路から飛び立つとまもなく急上昇する際に、雷に似た轟音を響かせる。耳をつんざく音だ。戦闘機のジェットエンジンは、音がうるさいほど高性能とされ

るようだ。マニアにはたまらない音かもしれない。基地周辺の住民にとっては迷惑な音だろう。F-15イーグル、F-4ファントムなど、次々に飛び立ち、周辺の空域を回ってから、戻ってきて着陸する。実際に飛んで見せてくれるところがうれしい。

航空自衛隊が持つ各種飛行機がエプロンに展示されている。F-4ファントムの機首の下に怪しいふくらみがあるので、そばの隊員に聞いてみたら、私の予想したとおり、後付された機関砲だと答えてくれた。ベトナム戦争などの実戦で、ミサイルだけでは戦闘力不足と判明し（ミサイルが必ずしも当たらないからだろう）、取り付けたものだ。戦闘機に機関砲は今でも重要な武器だ。

この航空際の目玉はブルーインパルスの編隊飛行だ。ジェット機の練習機が、カラーの煙を引きながら、飛行する。思ったより、控えめにおとなしく飛んでいた。観客の多くは高級な本格的カメラを携え、前列に陣取って写真を撮っていた。私も自分の高機能コンパクトカメラで写したが、空中を飛ぶ物体を的確に捕らえるのはなかなか難しかった。

バスに戻る時間に余裕があったので、私は基地正門近くの広場に行き、そこに展示されていたF-86セ

イバーやF-104スターファイターなど航空自衛隊歴代のジェット戦闘機を見て回った。色あせたりして往年の輝きを失ってはいるが、こんな機体が残っているのは感動ものであり、私は写真にそれぞれ収めた。家族でやってきた子供たちにとっては、遊園地のおもちゃにしか見えないだろうけど。



F-15イーグル、今でも最強クラスの戦闘機

### ⑤ 防衛省市ヶ谷

2017年1月25日(日)、旅行会社主催の団体ツアーで、市ヶ谷・四谷周辺の歴史的建造物を見て回った。市ヶ谷といえば、防衛省だ。このツアーに私が参加したのも、その本庁を見学できるからだ。た。 (なお、個人で申し込むこともできる)



編隊飛行するブルーインパルス、下側に見えるのは地上の戦闘機の一部

省庁の中でもひととき巨大な組織である防衛省の中核がここにある。この敷地内で自衛隊の訓練員800人ほど(彼らは建屋の一つに宿営している)を含め、1万人ほどの人が働いているという。われわれツアーの十数人は、その他の団体の人たちとともに、午前の部の見学コースに加わった。そろそろと、数人の広報担当者に誘導され、説明を受けた。通路に沿って主だった建屋と、外国の要人に閱兵してもらうための儀仗広場(荣誉をたたえ、歓迎する意味がある)などを見て回る。その広場の一角に、戦時中の司令部用の地下壕があるというが、今では崩壊の恐れがあるらしく、立ち入り禁止になっている。他のいくつかの地下壕を見てきた私としてはやや残念に思った。ここでは外側の建屋だけでなく、その他、地下に隠されている部分も多いのだろうと私はにらんだ。

さて、市谷記念館へ行く。パンフレットによると、これは昭和12年(1937)に陸軍士官学校本部として建てられた「一号館」の建屋の主要部分を残したもので、敷地の中央にあったものを、西側の隅へ移築したものだ。その敷地の中央には、今では防衛省中核の、近代的なビル「省舎A棟」が建っている。

昭和16年から大本営陸軍部がここに置かれた。昭

和20年8月に米軍に接收され、翌年5月極東国際軍事裁判 (International Military Tribunal for the Far East、通称：東京裁判) の法廷として使われ、米極東軍事司令部として使われた。昭和34年に返還されてから、陸上自衛隊の総監部が置かれた。その後、平成12年5月、防衛庁がここに移転するまで、陸上自衛隊駐屯地の本部的な役割を果たしていたわけだ。

入り口でスリッパに履き替え、中に進むと、すぐ講堂の中に入る。その一角で、ビデオ映像による解説を受けた。ここは旧陸軍士官学校の大講堂だったが、今では特に広いとは感じられない。

ここで東京裁判が行われたことは、感慨深い。一部改装して法廷として使われた(改装部分は元に戻されている)。敗戦国、日本の政治・軍事指導者の戦争責任を裁いた裁判だった。1946年5月3日から始まった。A級戦犯たちが(被告は日米開戦時の首相東条英機など28名)ここに引き出され、居並ぶ各国の裁判官や傍聴の記者たちの前で裁かれたたわけだ。戦争責任を追究する場だった。ただし、軍の統帥権を持ち、日本側の最大責任を負っていた主役の人物が、その28人の中に入らず、裁かれなかったことが歴史の事実として残る。



市谷記念館 (旧陸軍本館)  
見学者たちが歩いてゆく

そのあと、壇上の一段と高く設えられた玉座(昭和天皇がここに座り、陸軍関係の重要な式典をご観閲したという。特別に配慮されて構築されている)や、正面建物の二階部分の陸軍大臣室を見て回った。その辺りは、三島由紀夫事件が起きた現場でもある。それは

1970年11月だった。当時、ここは陸上自衛隊市ヶ谷駐屯地と言っていた。三島が、東部方面総監部の総監を人質に取ったあと、駆けつけた職員たちを追い払うために、刀を振り回したときにつけた傷がドアに数カ所残っていた。三島は車寄せのバルコニーの上で演説したのち、自決したことを広報官は説明してくれた。

「このあたりで切腹したんですよ」

その後、講堂の中には、軍服や軍用の小物、書状、当時の写真（地下壕の様子を含む）が展示されているコーナーがあり、しばし各自が自由に回った。

近くの庭の一角には、輸送用のヘリコプターが展示されていた。広報官は見学者を誘導して、操縦席の中まで入れてくれた。ついで見ようというところ。見学コースの終わりのほうで、自衛隊殉職者のための慰霊碑があると案内された。よく手入れされた広場の奥に、大きなモニユメントがある。全員で拝礼した。年に30人前後が亡くなっているという。意外に多い数だ。（数値に関してやや私の記憶は怪しい）。自衛官の殉職というのは「戦死」を私は連想する。戦死したら、ここに名前が刻まれるのだろうか、戦死という事例はいままで聞いたことがないから、どんなとき

に殉職したのだろうかと思う。訓練や日常的な活動中に事故で亡くなる自衛官が、少なからずいるのだろう。そういえば、航空自衛隊機が墜落して死者が出たという報道がときどき聞かれる。ここは自衛隊員にとって、おそらく靖国神社的な施設なのだろう。



コンクリート構造物  
訓練用トーチカ跡という

慰霊碑のある広場の一角に分厚いコンクリートの構造物があったので、興味を引かれた私は、帰り際、個

別に後ろのほうにいた広報官に聞いてみた。

「あのコンクリートは、高射砲の台座ですか？」

「いや、トーチカです。昔、隊員の戦闘訓練に使っていたものです」などと、彼は説明してくれた。

見学者たちの隊列がさっさと行つてしまうので、惜しいことに、私は立ち止まってよく見る事ができなかった。この慰霊碑のある広場は、その昔、訓練場だったようだ。訓練用にしては、かなり強固に作られているように見える。ともあれ、戦前からあるものだろうから、これも戦争遺跡の一つと言えそうだ。